

「貴方が居てくれたから」

公益財団法人海原会

理事 平野 陽一郎

初めての出会いには、私が、武器学校の総務部長に着任した平成十五年八月の事でした。

財団法人海原会の会長桜井房一氏（甲飛十二期生）は挨拶もそこそこに、「海原会役員の高齢化に伴い、将来、同会の運営を（旧土浦海軍航空隊の）地元阿見町にお願いすることになりました」と、嬉しそうに語っていました。

私は、自衛隊入隊以来何度か雄翔館で説明を聞く機会があり、予科練の概要は承知していましたが、財団法人海原会に関する知識は皆無で、桜井会長の発言にただ笑顔で「それは良かったですですね」と応じた記憶があります。

この時まで、私にとって財団法人海原会は、年に一回の慰霊祭で支援をする対象でしかなかったのです。

そのうちに、武器学校に隣接して阿見町予科練平和記念館の建設の話が持ち上がり阿見町主導で計画が作成され逐次実行に移されていきました。

表敬訪問を受けてから一年ほど経過した頃でしょうか、再び桜井会長が訪ねてきました。しかしその表情は、表敬訪問時の明るい笑顔とは異なり、苦悶の色を漂わせていました。桜井会長は、静かに口を開き、そして言いました。「阿見町に海原会の運営をお願いする話は白

紙に戻したい。ついては、将来海原会の運営を武器学校にお願いできないでしょうか」

私にとっては寝耳に水で、「突然何を言い出すの、この人」といった思いでした。その時は会長の依頼を一蹴して、お引き取りいただきませんでした。

それ以来、年に何度も桜井会長は学校を訪問するようになりました。また、慰霊祭や学校の記念行事、学校主要幹部そしてOB会役員等との懇談会や忘年会の席でも、桜井会長の目はいつも海原会の後継者発掘に向けられていました。

数か月経った頃、突然桜井会長は次のようなことを口にしました。「平野さん、我々は本来先の大戦で死んでご奉公をすべきであった人間です。それが、はからずも戦後六十年も生かされてきました。生かされた我々は、若くして亡くなった同窓の慰霊のために戦後を生きてきたと言っても過言ではありません。そして、その我々もやがて鬼門に入る時期が間近に迫ってきています。我々が戦没同窓が待つ場所へ行った後、一体誰が国のためにわが身を投げ打った戦没予科練同窓の慰霊を継続してくれるのでしょうか。それを考えると死んでも死にきれないんです。」

当時、九州に残していた桜井会長と同じ年の親父の顔が思い出されました。

それ以来、私は桜井会長の申し出を真剣に検討してみようと心が傾いていきました。

もちろん、それまでの経緯は当時武器学校長であった安井現OB会長にも逐次報告し、同意と指示をいただきながらのものでしたが、その後は前向きに検討を進めることで同意をいただき力強い支持と指導をいただきました。そして、安井学校長と二人で出した結論は「武器学校OB会にお願いするしかない」というものでした。

早速当時の木村OB会長（平成二十六年逝去）及び小野幹事長にそれまでの経緯と、協力の依頼を正式に行いました。木村会長は二つ返事で「OB会が面倒見ましょう」と言っていたいただきましたが、小野幹事長は極めて慎重な姿勢を始終壊すことなく「桜井会長の立場や依頼の主旨は十分理解できるし、OB会として協力できるものであれば協力したい。しかしながら、我々は財団法人の何たるかさえ承知していない。そんな我々が突然財団法人海原会を運営して欲しいと言われても、はいそうですかと簡単に受けるわけにはいかない。」と発言されました。

冷静になって考えればまことに的を得た発言でした。桜井会長に、厳しい調整の現状を逐次伝えながらも、並行して武器学校とOB会の間で調整が進められました。

そして数か月後、小野幹事長から次のような提案がありました。「我々はあまりにも財団法人について、ひいては海原会の内部事情について知らな過ぎる、そのような状態で安易に将来、海原会の運営をOB会で引き受けるとは言え

ない。ついでには、四、五年勉強をさせていた
きたい。そのためにOB会から適任者を数名海
原会理事として派遣をする。そして、時期が来
たら海原会そしてOB会の双方にとつて最良
の方策を提案したい。

この際、仮にOB会が海原会を継承すること
になったとしても、我々は戦没予科練生の慰霊
と遺訓の顕彰並びに遺品などの資料の維持管
理が最終の目的であると考えており、財団法人
の存続や海原会の維持増勢は目的ではない。よ
つて、将来財団法人海原会を解散したとしても
異論はない旨の同意をいただきたい。」

もちろん、学校側に異論はなく直ちに桜井会
長に情報が伝えられました。会長は涙を流さん
ばかりの喜び方で、安堵した様子が見て取れま
した。そして、言われた「我々は、もはや地位
も名誉もまして財産も必要とはしない。慰霊祭
も、現在のような大規模なものでなくていい。
海原会会長と武器学校、OB会、阿見町の代表
者が期日を決めて集まり、二人像の前で献花を
していただければ、それだけでいい。これまで
生かされてきたことで十分満足しているし、OB
会の皆さんがそれを条件で引き継いでいた
だけるのであれば、全く異論はない。」そう言
って笑顔を見せました。

その会長が、まさか、それから数年後帰らぬ
人となろうとは、その時は考えもしませんでした。
きつと、あの世で戦没予科練同窓の皆さん
と会われて、自慢げに「海原会会長として最小

限の仕事はしましたからね。」と話しているよ
うな気がします。

そして、私が自衛隊を退官すると同時に、OB
会からの派遣理事の第1号として海原会で
活動するようになりました。その後、安井元学
校長が、続いて阿保元教育部長が更には酒井元
研究部長、福田元学校長が理事として派遣され
ましたが、安井理事は武器学校OB会長に就任
するために、また阿保理事は健康上の理由で退
任され、現在私と酒井理事（副理事長）、福田
理事（雄翔館整備担当）更には篠田参与（慰霊
祭担当）さらには安井元学校長が海原会体制改
革の担当参与として返り咲き活動しておりま
す。

海原会は、現在会員数約千百名ですが、年間
約二百名の会員が逝去または健康上の理由で
退会を余儀なくされており、近いうちに会員の
ほとんどがご遺族・武器学校OB・一般の皆さ
んに替わらざるを得ない状況となっております。
故桜井房一会長が数年前に予測した事態が
今我々の目前に迫ってきているのです。

我々は、まだまだ元気で活動が可能な予科練
出身役員とOB会あるいは一般会員出身役員
が忌憚のない意見を出し合い協力して、近い将
来、故桜井会長が思い描いた海原会になれるよ
う努力していかねければと思っています。

小野幹事長が九年前に口にした「海原会そし
てOB会の双方にとつて最良の方策」を提案し
実行に移すべき時が、いま訪れようとしています。

す。

『そして、それを現実のものにできたのは、
桜井房一さん、貴方が居てくれたから』

ご冥福をお祈り申し上げます。